

「施しの区別個々の自相」～「清浄な施し」

(p 192 p p 10～p 195 p p 25)
2018. 8. 26 山内 克美

施しの区別・個々の自相

それら個々の自相（定義）を説明するなら、

財施の自相

第一：財施には二つ、

- 1) 不浄の施しと、
- 2) 清浄の施しです。

それもまた、第一は捨てるべきです。第二は行持[・実践]すべきです。

不浄の施し

それについてもまた、不浄の施しは四つ――

- 1) 思惟が不浄であるものと、
- 2) 事物が不浄であるものと、
- 3) 田が不浄であるものと、
- 4) 方便が不浄であるものです。

* 自相：(例文仏教語大辞典より)

自体、それ自体。事物それ自体の本性、それ自体が持つ特質、本質。

* 田：(例文仏教語大辞典より)

袈裟の田相（袈裟の布の縫い合わせ方が田の畔に似ているさま）。施しを受ける人、僧衆。

そのうち、[第一:]

誤った思惟により施しを与えることは、

他者を害するために施すのと、

今生の名声が欲しいから施すのと、

他者と競争するために施すのです。

その三つもまた、菩薩は捨てるのです。すなわち、『菩薩地』[の「施品」]に、

「菩薩は他の者たちを殺害する、または捕縛する、または処罰する、または牢獄に入れる、または放逐するために、施しを施さない。」というのと、

「菩薩は、名声と評判のために、施しを施さない」(V 163)というのと、

「菩薩は、他者と(H 73 b)競争するために施さない。」と説かれています。

* 菩薩地：(例文仏教語大辞典より)

三乗共通の十地の第九。迷いの世界に生を受けて、世の人を導き救う位。菩薩の修行の段階。

[第二:]

劣った[思惟による]施しは、[自己のために]後生における困窮を怖れて施すのと、

天・人の身体と[受用すべき]資財を欲しがって施すのです。

その両者をもまた、菩薩は行うべきでないのです。すなわち、[『菩薩地』の「施品」に]

「菩薩は[未来に]困窮するであろうと疑う怖れにより、施しを施さない」と

「菩薩は帝釈天と[魔と]転輪王と自在天[の果]に依って、施しを施さない」と説かれています。

他の不浄の施しもまた『菩薩地』に捨てることを説かれています。

それらの意味をまとめるなら、

[第二:]不浄な事物を捨てることは、菩薩は毒と火と武器など、受けとる者彼自身を害さん[がため、]、または相手を害さんがために請うなら、施さないのです。

『宝鬘』に、「その者に毒が益するなら、彼に対して毒をもまた施すべきです。

最上の食べ物もまた益さないなら、彼に対してそれを施すべきではない。

[毒]蛇に噛まれた[場合]のように、(V 164) [ためになるなら、指を切るような]非樂もまた為すべきだと[牟尼は]説かれています。

驅り立てられるなら、施しをしないのです。」と説かれています。

畏と狩りの仕掛けとその方便など、要するに害になるものと、苦になるものの何でも、それらすべてを請う者たちに対して、施さないのです。

父と母を施さない。

父と母を[借金の]質に入れない。

子どもと妻などを喜ばないながらに、他の欲しがる者たちに施さない。

多くの[受用すべき]資財がありながら、少しも施さない。

[罪業により]積み重ねた施しをしないのです。

[第三:]不浄な田を捨てることは、魔の種族が悩ませる思惟により (H 74a) 身体を請うとしても、自己の身体と支分を刻んで施さないのです。

魔が加持した心を持った[有情]、または狂気と錯乱した心を持った有情たちに対してもまた、身体を施さないのです。

彼らは欲しい事物がないのです。心に自由が無いから、[菩薩に無理な要求をして]あら探しをするのみにすぎません。

満足している有情に対しても、飲食を施さないのです。

*支分：(例文仏教語大辞典より)

全体を幾つかに分けた、その部分のこと。

[第四:]不浄な方便を捨てることは、

喜ばしいことと怒ったことと錯乱したことにより、施しをしないのです。

貧しい者を軽蔑することと尊敬しないことに適用して、施しをしないのです。

請う者に対してもまた、

叱責することと脅迫することと圧迫することにより、施しをしないのです。

清浄な施し

清浄な施しを行持[・実践]するには、三つの義——

- 1) 事物と、
- 2) 所依事と、
- 3) 方便です。

*所依：(例文仏教語大辞典より)

よりどころ、根拠。よりどころとなっているもの。

第一[:事物]についてもまた二つ、

- 1) 内の事物と、
- 2) 外の事物です。

そのうち、内の事物は、自己の身体に属するものです。

そのようにまた『那羅延所問經』に、「有るのなら、

手を欲しい者には、手を施す。

脚が欲しい者には、脚を、

(V 1 6 5) 眼が欲しい者には眼を、

肉が欲しい者には肉を、

血が欲しい者には血を[施す]。」などと説かれています。

それもまた、菩薩の初業者は、自他平等の知が生じていないときに、身体を丸ごと施すことにより身体を警護し、施さないのです。

そのようにまた『入行論』に、「非の思惟が不浄であっては、この身体を施すべきではない。どうしてもこれ[の世]と他[の世]のために大きな利が成就する因として与えるべきです。」と説かれています。

外の事物は、食べ物と飲み物と (H 7 4 b) 衣服と、乗物と、子どもと妻など、如法に成就したものたちです。

そのようにまた『那羅延所問經』に、

「外側の事物はこのとおりです——財宝と穀物と銀と金と宝珠と装飾と馬と象と息子と娘と」などと説かれています。

それもまた、在家の菩薩は、外・内の事物が保有するかぎり、施すことが許されています。

『莊嚴經論』に「菩薩が、身体と資財を他者に施さないことは、全く無い。」と説かれています。

出家の菩薩は、他のすべてを施すが、三つの法衣それは施すことは許されていません。そのように『に「三つの法衣以外は施す」と説かれています。法衣を施したなら、利他が損なわれることになるからです。(V 1 6 6)

*如法：(例文仏教語大辞典より)

仏の教えにかなうこと、規則とおりになこと、また、そのような行いや修行。

[第二:] 所依事

田は四つのうち

1) 功德により差別された田は、上師と[三]宝などです。

2) 益してくれたことにより差別された田は、父と母などです。

3) 苦により差別された田は、病人と寄る辺なき者などです。

4) 侵害することにより差別された田は、敵などです。

そのようにまた『入行論』に、「功德[の田]と益してくれる田[と苦しむ者において善は大きくなる]」などと説かれています。

*差別：(例文仏教語大辞典より)

区別すること。また。その相違、区別。

[第三:] 施しを与える方便は、

1) 思惟の円満により施すのと、

2) 行動の円満により施すのです。

そのうち、

第一[: 思惟の円満により施すの]は、悲 : あわれみにより動機づけられて正覚と有情のために施すのです。

[第二:] 行動の円満により施すのは、すなわち、(H 7 5 a) 「菩薩は

1) 淨信と、

2) 恭敬と、

3) 自らの手と、

- 4) 時に到ったのと、
5) 他者を害さないことにおいて、施しを施すのです」と『菩薩地』に説かれています。

そのうち、第一〔浄信〕は、三世に歡喜を持っているのです。施しの以前に意が歡喜し、施すとき心が澄淨であり、施しおわってから後悔が無いのです。

〔第二：〕恭敬は、敬うことにより施すのです。

〔第三：〕自らの手は、他者に任ぜずに施すのです。

〔第四：〕時に到ったのは、自己が得た時に施すのです。

〔第五：〕他者を害さないのは、自己の眷屬、および大恩師をあわせた者たちを害せず

に施すのです。
それもまた、自己の物であっても、物を成就する眷屬たちが顔は涙していても、施さないのです。

大恩師をあわせた者の財宝を奪う、または盗む、または謀ってからでもまた施さないのです。

また『アビダルマ集論』に「[どのようにして施しは円満なのか。]たびたび施すし（V 167）、偏らず施すし、欲するものを完全に施すからです。」と説かれています。

そのうち、「たびたび施す」というのは、施主の差別、〔すなわち〕繰り返し施すのです。

「偏らず施す」というのは、田の差別、〔すなわち〕田に分け隔てなく施すのです。

「欲するものを完全に施す」というのは、事物の差別、〔すなわち〕受けとる者の思惟に応じて、欲しいものを施すのです。

〔以上、〕財施を説明しおわりました。

◎ご法話「六波羅蜜」（2018.3.6-7）より、布施波羅蜜の部分の一部抜粋◎

一番最初の財産を施す「財施」というのですけれども、「財施」でも、とくに仏に布施を行なう。

たとえば、お寺とかに行って御堂で布施を行なう。仏像などに対して布施を行なう。そして、經典などに対して布施を行なう。もしくは、正法を實踐されている僧侶たちに布施を行なう。

それによって、福德資糧というものを積むことができます。

そのように仏に供養を行なうのですけれども、その際には、「ケチというものを無くして、ケちな心を持たずに供養を行なう」わけです。

お寺などで御堂に行って、身語意すべてで供養を行ないます。

そして、自分に出来る限りの布施を行ないます。

実際に教えを實踐されている僧伽、お坊さんたちに、出来る限りの手伝いをしたりとか、そういう布施を行なう。

また、お寺に行って「御花を供養する」とか、「灯明を灯す」とか「御線香を灯す」とか。

こういうのは、「いい香り」とかそういうものを供養するわけです。

そのようにお寺などに行ったときに、たとえば食べ物、果物とか何でもいいのですけれども、「きれいな動機で布施をする」ことによって、それらが「三宝に対する布施」になります。

たとえ何もなかった場合でも、たとえば「きれいな水を捧げる」だけでも、それでも布施になります。

また、僧侶の方たちに食べ物を供養する、もしくは服とか何かを供養する、というの

でも多くの功德を積むことができます。

また、日本でもおそらくおられると思うのですけれども、瞑想に入られている僧侶の方たち、もしくは勉強されている僧侶の方たちを供養するというのは、三宝に供養するのと変わりませんので、そこからも大きな功德を積むことができます。

また、法友、法を行なう世俗の男性・女性に関らず、たとえばそういう人たちが何か経済的な理由でなかなか勉強したくてもできない・・・とかいうときに手助けをする、というのでも福德を積むことができます。

私たちは今、人身を得ているのですけれども、それが意味のあるものにしていくためには、正法を成就していくことが必要です。

正法を成就することによって、人身が意味のあるものになっていくわけです。

この「布施」を行なうことによって、我々の人身を意味あるものにしていくことができます。

ですので、功德という宝を積んでいくことができる。

今生において経済的に余裕があるならば、それを与えることによって、この身体を意味あるものにして行ける。

それはなぜかといいますと、「布施」を行なうことによって功德を得られるからです。

ですので、功德を積むために出来る限りのことをしていくわけです。

われわれはこの今生で自分たちが生活するのに足りる分があればいいわけです。

それよりも功德を積んでいくことが大切なわけですので、もし自分に経済的な余裕があるならば布施にまわして、布施を行なうことによって、来生も経済的によくなるし、また、法のためにそれを行なっていけるわけです。

そうすることによって、「正法のためになった」というふうになるわけです。

「何か問題のある、困っている人に布施をする」というのがあるのですけれども、たとえば生活に困っている人に布施を行なうということもありますし、たとえば服がない、着る物がない、もしくは住むところに困っている人や、身体的に何か困った状態がある・・・という人は、いろんなたくさんさんの苦しみというものがあるわけですから、その中で自分が出来る限りの手助けをする、これが「布施」になるわけです。

勿論、誰かが生活に困っていた場合に、いつもいつも手助けするというのはなかなか難しいわけなのですけれども、「今日この日の一回分のご飯を与える」とか、何か一回だけでもいいわけです。

たとえば、「病気になっている人に薬をあげたい」と。

「毎日はあげられないけど、一粒だけの薬なら買える」というので、その一粒を買って与える、とか。

また、服がない人なら、服を・・・というふうに、出来る限り「布施」を行なうのですけれども、一回だけでも二回だけでも出来る限りで行っていくことが必要です。

もしお金に余裕があるようなお金持ちの人でしたら、学校を建てたり病院を建てたりいろいろなことをして学生さんに教育を与えたり、病気の人たちに医療的な手助けとか、いろいろな手助けができるのですけれども、我々はそんなに大きなことではなくても、それぞれで出来ることがあるわけです。

たとえば、小さな虫がいるかと思うのですけれども、小さな虫に注意を払う、そして、自分の食べものを少しあげてやるとか、そういうこともできますし、自分の眼の前や近くにいる人、家族や家で飼っている動物とかに対して与えることもできますし、ま

た近くにいる虫たちを殺さないようにちゃんと気を付けて大切に育てやる・・・というのも「布施」のひとつになるわけです。

そのように他の者たちに、たとえば何か薬を与えるなり、三宝に供養を行なうなり、僧侶たちに対して布施を行なうとか、何か「布施」を行なうのですけれども、もし何も施すもの・財産的なものがなかったとしても、「身・語・意」、身体と言葉と心というものは、私たちにはあるわけです。

これを使って「布施」を行っていくことができるわけです。

そして、自分の両親や兄弟・友人たちを大切に育て、面倒をよくみる、というのも「布施」になるわけです。

たとえば、父母が年をとったときには、相手をちゃんと面倒をみる、と。気を付けて育て、と。

相手に対しても怒ったりしないで話をよくする、と。

身体的な手助けもありますし、言葉での手助けというのは、「丁寧に話をする」「きつい話し方をしない」ということもひとつの「布施」になるわけです。

また、「心には愛情をもって、相手のことを心配して大切に育て」、と。

ですので、こういうこともすべて「布施」になるわけです。

ですので「布施」という際に、必ずしも何か物体・モノがなくても、それでも「布施」になるわけです。

そういうふうに、身語意というものを使って布施をする、と。

そのなかでも中心になるのは「心」です。

きれいな心で布施を行なうことによって、それが本当の「布施」になるわけです。

ですので、いつも「他を利益しよう」という心をもって、「慈悲の心」をもって、出来る限りのことをする。

大きなことであろうとも小さいことであろうとも、「布施」を行なっていく。

とくに、「布施」を行なう際には、「父母に対する布施、家族に対する布施というのが一番の布施だ」というふうに説かれます。

そのように布施を行なう際に、動機というものを「きれいな動機で」行う必要があります。

動機には、「善い動機」と「悪い動機」という二つの動機があるのですけれども、それによって起ってくる結果にも違いが出てきます。

きれいな動機で布施を行うことによって、「六波羅蜜」で説かれる「布施波羅蜜」になるのですけれども、もしも間違った動機で行いますと、たとえ大きな布施をしたとしても結果が伴ってこないわけです。

「正しい動機によって他に布施をする」とはどういうことかといいますと、「他のいきもののためになるように布施を行なう」、と。「他のいきものが苦しみから逃れられるように布施を行なおう」という気持ちで行う布施が、きれいな正しい動機で行った布施です。

反対に、間違った動機というのは、「自分が何かを与えた。三宝に供物を捧げた。物乞いとかお金のない人達にお金をあげた。薬がない、欲しい人に薬を与えた・・・ということによって、自分が今生でも幸せになり、来生でも人身を得てお金持ちになるように・・・」ということを考えて行うというのが、間違った動機なわけです。

勿論やっていること自体は善いことなのではございますけれども、考えていること自体を見ます

と、それは不善の行ないになりますので、せっかく善いことをしていても得られる結果が小さくなってしまうわけです。

「今生で善い行いをして功德を積むと、それが今生の自分の幸せ、来生の自分の幸せ・・・」というふうに考えて布施を行ないますと、勿論その布施の結果として来生に金持ちにはなれるのですが、それでそのときにいまの自分の積んだ功德というのが全部終わってしまいますので、結局それで終わりのわけですね。一度金持ちになつてそれで終わってしまうわけです。

ですが反対に、正しい動機を持って「自分が今生で幸せになりたい、とか、来生で幸せになりたい、なりたくない、なりたくない」とかそういうことを考えるかどうかと関係なく、結果として幸せを得るわけです。

ですので、まずは動機というものが必要でして、動機が正しいことによって、正しい動機で布施を行なうことによって、そこから得られる結果も消えない。積んだ功德も消えずに、自分が仏となるまで功德が残るわけです。

ですので、正しい動機、悲心（「他が苦しみから逃れればよいのに」という思い）と、愛情が必要なわけです。

「布施」を実際に行う時に、たとえば三宝に対して布施をするなら、「向こうがありがとうとか思ってくれる、自分のことをよく思ってくれる・・・」という期待をしたり、もしくは、お金のない人にお金を与えたり、薬がない人に薬をあげたり、父母に対して何か善いことをしたときにも、「自分に対して何かよくしてくれる、自分に対して何か見返りを求めてやる・・・」というのは間違いです。

自分の身語意すべてで何をやったとしても、「自分に対して何かよくなるように・・・」というふうに考えてやるというのが間違いなわけです。

「業とそこから生まれてくる結果、異熟の果に対して、何も希望なく行う布施」というものが必要なわけです。

すべてのいきものには苦しみがあるわけですので、苦しみをなくするための必要な手伝いをする、と。

そこに、「自分自身に何か返ってくるだろう・・・」というような希望をもたずに、「自分に何かいいことがあればいいのに・・・」というような思いをもたずに、業と異熟に対して何も希望をもたない、そういう「布施」とが必要なわけです。

ですので、心で、「自分が何か善いことをした」ということに対して随喜をする、というだけで十分なわけです。

そのように自分で「布施」、何か手伝いというものを行なっていくのですが、たとえば布施を行なった際に、布施を行なった相手が、じつはあまり問題もないのに自分に嘘をついていた・・・と。そして、自分が布施をした・・・ということがわかったときに、後悔をするときがあります。

もしくは、「相手が何か私にこういうふうにやってくれることを願って騙されていた・・・」ということがわかったら、自分が後悔するわけです。

ですが、私たちはさいしょに布施を行なう際に、「相手に布施をすべきであるのか？すべきでないのか？」ということ、まず、布施をする前によく考えてみる必要があります。

もし「相手に本当に苦しみがある、手伝いが必要だ」ということがわかれば、まず「私は手伝いをする事ができるか？」ということ、まず考えて、必要でありまた出来る

ということであれば、それをするわけです。その手伝いをして布施を行なうわけです。

その「布施」を行なってしまった後は、どのようなことがあったとしても、それはもう後悔しても仕方がないわけです。その結果がよかろうとも悪かろうと何であったとしても、そこではもう後悔をすることは必要ないわけです。

「向こうの側が本当に苦しんでいたか？じつは嘘だったか？」というのは、さいしょの時点で考えることはできますけれども、済んでしまっただけからはもう何も言うこともすることもできないわけですので、やってしまった後は、自分がやった布施に対して随喜をする、自分自身で喜ぶだけで、もう後悔する必要はないわけです。

ですが、「また今度同じようなことがあったときには気を付けよう」というふうに思うだけで十分なわけです。

布施をする際には、「まず、自分の状態というものをよく鑑みる、理解しておく」ということが必要です。

たとえば、何か困っている人に対してすぐに「じゃあ、手伝いをしますよ」というふうに約束してしまうと、約束したからには、それを行なっていかないといけないわけですね。自分で出来ることなら約束すればいいですし、出来ないことであつたら約束はしないほうがいいわけです。

もし、「手伝いますよ」と言っておいてやらない・・・というのはやはりよくないです。まずは「自分がそれを出来るのか？出来ないのか？」ということをもっと理解しておくことが必要です。

慈悲の心があって、「大きく手伝いたい」と、「どうしても手伝いたい、何でもやりたい」というふうには手伝って、相手の苦しみが全部とれるかどうかは別として、自分の持っているものをすべて相手に与えてしまっただけで、最後自分に何も無くなってしまう・・・と。そうすると、今度は自分に苦しみというものが始まって来るわけです。

自分の財産も何も残ってなくて、今度は自分自身の苦しみが起こって来て、後悔が起こる・・・。

そこから怒りとか嫉妬が起こって来て、今度は自分が不善の業を積む結果になってしまうわけです。

ですので、さいしょ布施を行なう際には、「自分がどれくらい布施を行なうことができるのか？」、と。

勿論動機の時点で出来るだけ広く布施をしようというふうに思うことは非常に大切なのですが、布施を行なうときは必ず「自分の能力と見合った布施」を行なうことが必要なのわけです。

そうすることによって、自分が布施をやった後に困らない、と。

ですので、「自分の状態と合った布施」を行なって下さい